慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	FutureLearnプロジェクトにおけるオンラインコースの開発
Sub Title	
Author	髙信, 彰徳
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC Review Keio University). Vol.4, No.1 (2017. 3) ,p.34- 41
JaLC DOI	
Abstract	本プロジェクトは国際的な大規模公開オンラインコース(MOOC : Massive Open Online Course)プラットフォームの1つであるFutureLearn(本部 : 英国ロンドン)上の世界の1万人規模の学習者がソーシャルに学べる総合的に質の高いコースを持続的に開発・運用し, 慶應義塾大学にとって新しい学習環境と戦略の提案を行うことを目的としている。本稿ではFutureLearnの特徴と, FutureLearnプロジェクトのチーム構成を述べ, 2017年2月までに開講した2つのコースである「Japanese Culture Through Rare Book」と「An Introduction to Japanese Subcultures」の, 開発過程において起きた課題とその解決方法, コース評価を経て, 今後の展望について報告を行う。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000004-0034

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学 DMC 紀要 4(1), 34-41, 2017

FutureLearn プロジェクトにおけるオンラインコースの開発

髙信彰徳（慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科（KMD）修士課程）

概要
本プロジェクトは国際的な大規模公開オンラインコース（MOOC：Massive Open Online Course）プラットフォームの 1 つである FutureLearn（本部 ： 英国ロンドン）上の世界の 1 万人規模の学習者がソーシャルに学べる総合的に質の高いコースを持続的に開発 ・ 運用し、慶應義塾大学にとって新しい学習環境と戦略の提案を行うことを目的としている。本稿では FutureLearn の特徴と、FutureLearn プロジェクトのチーム構成を述べ、2017 年 2 月までに開講した 2 つのコースである「Japanese Culture Through Rare Book」と「An Introduction to Japanese Subcultures」の、開発過程において起きた課題とその解決方法、コース評価を経て、今後の展望について報告を行う。

1. はじめに

1.1 MOOC とは

MOOC とは、大規模な受講者を対象とする、無償で受講できるオンラインコースであり、プラットフォームは世界各地で多数運営されていて、Coursera、edX、FutureLearn 等がある。各プラットフォームにはそれぞれの特徴があるが、いずれも世界の有名大学をはじめとした数多くの大学が参加し、基本的に無償でコースを開講している。国際 MOOC では主に英語による講義だが、各国 MOOC では自国の言語を中心としたプラットフォームもあり、日本でも 2015 年から、gacco、OpenLearning、放送大学などが開始された。

1.2 FutureLearn とは

2012 年に英国のオープン大学によって設立された FutureLearn は、ソーシャルラーニング、つまり学習者同士の学びを重視しているプラットフォームである。ブリティッシュ・カウンシルやブリティッシュ・ライブラリー等の機関や、世界有数の大学、研究センター、専門教育機関が様々なコースを提供しており、2016 年現在 530 万人の学習者がいる。コース登録は全て無料で、コースを修了した際に、修了証を取得する場合は、有料で発行することができる[i]。また定められたコースをいくつか修了し、最終試験に合格すると、そのテーマに関する賞がもらえる「プログラム」という制度もある[ii]。そして 2017 年より、オーストラリアのディーキン大学が FutureLearn のみで、修士号を取得できる大学院プログラムを提供予定だ[iii]。

FutureLearn は、英国に本部を持つが、学習者の 75％が海外からの学習者であり、国際的なプラットフォームである。他にもオンラインコースのプラットフォームは様々存在するが、FutureLearn はその中でも、学習者同士の学び合いである「ソーシャルラーニング」を積極的に支援することを方針に打ち出しているユニークなもので、いつでもどこでも学べる環境というだけでなく、教室での学習では体験できない新しい学びを実現している。FutureLearn のミッションをみると「アクセスがしやすく、柔軟な方法で、楽しく、効果的でそして有益な、最高のソーシャルラーニングの体験を開拓すること[iv]」をミッションとしている。

2. FutureLearn のラーニングデザイン

2.1 FutureLearn コースの構成

FutureLearn のコース構成は、コース、週、アクティビティ、そしてステップという順番で構成されており、ステップがもっとも小さい単位である。ステップにはビデオ、読み物、ディスカッション、クイズといった種類があり、1 週は約 20 程度の Step で構成されている。一つのステップを完了するための時間は最大でも 10 分になるように設計されている。

慶應義塾大学が配信した「An Introduction to Japanese Subcultures」を例にとると、このコースは、4 週あり、第 1 週 :LOVE の中に、Introduction というアクティビティあり、そのアクティビティの中にステップがある（図 1）[v]。

学習者はこのステップをひとつずつ完了してアクティビティを完了し、第1週のアクティビティが全て終了したら、第2週に移動してコースを進めていく。各週の下には、開始日が記載されているが、コース開始日からすべての週がオープンになるので、学習者は先の週に進むこともできる。コースのアクセス期間は、登録時期に関係なく、開講期間＋2週間である。こちらも「An Introduction to Japanese Subcultures」を例にとると、このコースの開講期間は4週間のため、そこから＋2週間の計6週間は自由にアクセスすることができる。このように、ある程度進捗が遅れても、自分のペースで学習することができる。また、一度登録してしまえば、次の再配信まで、ずっと学習することが出来るので、自分のペースで学習することができる。

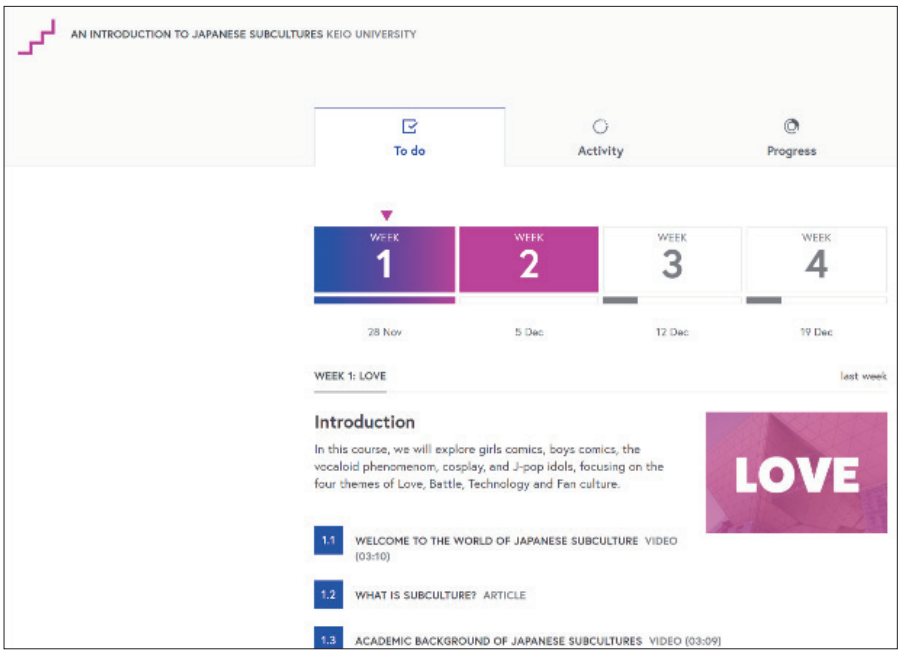

図1　FutureLearn のコースページ

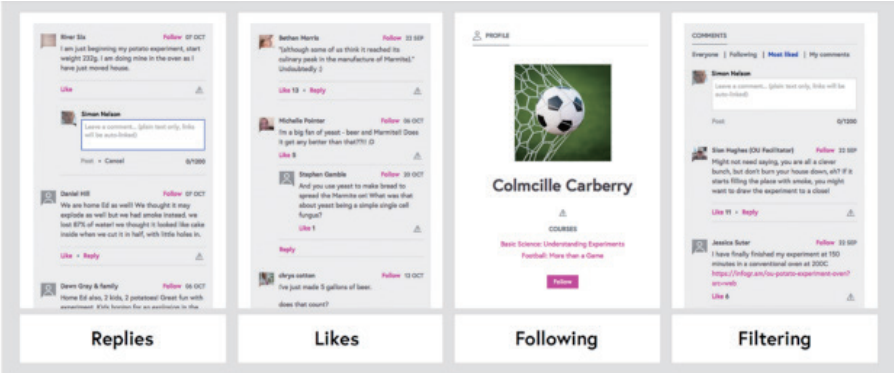

図2　FutureLearn の機能

その他にも FutureLearn には他の学習者と会話を促進するために、各ステップにはコメント機能があり、簡単に返信、ライク、フォローが行える（図2）[vi]。

フォローをしたユーザに対しては、コメントボードでフィルタリングすることができるので、コメントを見逃すことがなくなる。

2.2　FutureLearn の教育設計のコンセプト

FutureLearn の教育学とラーニングデザインは、「ストーリーテリング」「会話の誘発」「進歩を喜ぶ」という3つの要素からなる。それぞれの特徴について、ひとつずつ取り上げる。

2.2.1　ストーリーテリング

「ストーリーテリング」とは解説から始まるのではなく、体験からはじまる学びを意識してコース開発を行うという特徴がある。教室での授業では、説明し、体験しフィードバックをもらって学んでいくが、「ストーリーテリング」とは、ビッグクエスチョンに向かって、学習者が小さなステップを経て学習しやすくすることである。例えば、Secret Power of Brands というコースでは、「ブランドとはなにか」というビッグクエスチョンを設定し、この疑問に答えるべく、ビデオや読み物、ディスカッションやクイズを設計し、コースに一貫性を持たせることを推奨している。

2.2.2　会話の誘発

「会話の誘発」では、ビデオや読み物の中で学習者に質問を投げかけたりして、会話を促進させることを推奨している。また、すべてのステップにはコメント機能がついており、学習者はトピックに関して、他の学習者と自分の考えに関する共有や探求を行うことができる。

2.2.3　進捗を祝う

「進捗を祝う」では、FutureLearn のステップは、自分でそのステップを完了したかどうか、自分自身で判断してボタンを押すことになっている。また、進捗タブでは、自分が何％のステップを完了したかが、すぐにわかるようになっている。

クイズのステップでは選択問題の場合、他のプラットフォームでは不正解であればもう一度やり直すだけだが、FutureLearn の場合は、不正解の場合でも、コース担当教員から自動的にコメントがもらえ、どのステップをもう一度振り返れば良いのかが、わかるようになっている。

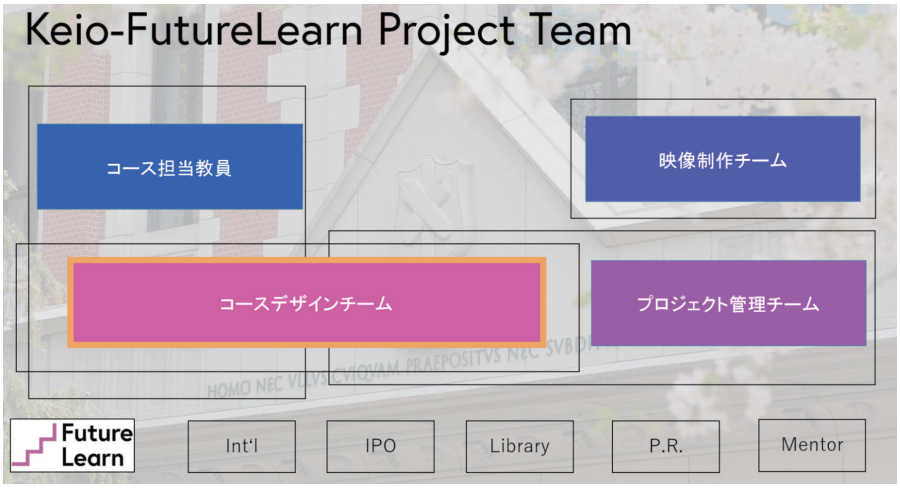

図 3　チーム図

3. Keio-FutureLearn プロジェクト

3.1　Keio-FutureLearn プロジェクトリードメンバー

2015 年の 7 月に慶應義塾大学は FutureLearn との契約を結び、本プロジェクトは開始された。プロジェクトリードメンバーは、コース担当教員、コースデザインチーム、映像制作チーム、プロジェクト管理チームである。

コース担当教員は配信するコースによって担当が変わる。今回は、慶應義塾大学斯道文庫（以下、斯道文庫）と、慶應義塾大学文学部教授らが担当した。コースデザインチームは、慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科（以下、KMD）の Global Education プロジェクトと慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター（以下、DMC）が担当している。映像制作チームは DMC と、DMC から業務委託を受けた株式会社カムサイド担当している。プロジェクト管理チームは DMC が担当している。

コース担当教員は、主にコースの内容を作成、コースデザインチームは、主にコース担当教員とともにコース内容を考え、それを FutureLearn のラーニングデザインに当てはめて再設計を行い、Markdown を用いて FutureLearn のプラットフォームでコースを作成する。また FutureLearn のスタッフと共に、Skype で定例ミーティングを行い、コースの進捗を共有しアドバイスをもらう。プロジェクト管理チームは、全体の経理や事務などを担当している。

3.2　Keio-FutureLearn プロジェクト外部連携

Keio-FutureLearn プロジェクトではプロジェクトリードメンバー以外にも、外部と連携を行っている。著作権管理チーム、慶應義塾大学国際連携推進室（以下、国際連携室）、慶應義塾大学広報室（以下、広報室）、FutureLearn チームと協力している。（図 3）。

著作権管理チームは、DMC から業務委託を受けた株式会社シュヴァンが担当している。国際連携推進室と広報室は、ソーシャル・ネットワーキング・サービスのひとつである Facebook[vii]を利用して広報を行っている。FutureLearn チームは、本プロジェクトの進捗管理やアドバイス、またコース開始前の品質保証を担当している。

国際連携推進室と広報室は主に慶應義塾大学ホームページでのプレスを担当している。著作権管理チームは、著作権の権利処理を担当している。

筆者は、コースデザインチームの一人としてプロジェクト開始当初より参加している。コース準備時では、主にコース担当教員とともにコース内容を設計し、コース開発時でその内容を FutureLearn のプラットフォームに合わせ、Markdown を用いてアップロードする業務を行っている。ここではビデオの内容や字幕追加作業、外部リンク等も含む。また、コース運用時は、学習者からのコメントのチェック等を行い、適宜コース担当者と連絡を取り、コース評価時にはデータ分析を主に担当している。また広報の一環として、Keio-FutureLearn プロジェクトの Twitter の管理・運用も行っている。

4. Keio-FutureLearn プロジェクトのコース開発

FutureLearn プロジェクトでは日本文化に関するコースを開設し、日本文化や日本語の知識がない学習

者にも学習してもらうことを試み続けてきた。だが、慶應義塾大学が日本の大学として初めて FutureLearn に参加し、日本文化に関するコースを配信したということもあり、様々な課題に直面した。

特に教室での授業設計からオンラインコース設計への変換、多様な学習者への対応、日英の多言語対応や、文化的背景の補助、オンラインにおける著作物等の利用範囲、そして学習者同士がソーシャルラーニングをすることができるコースデザイン等、コース開発・実施の過程において課題が浮き彫りとなった。そこで、実際に開講した２つのコースを基に時系列順に、コース準備、コース開発、という２つの段階で起きた課題と解決方法について取り上げ、最後にコースの評価について述べる。

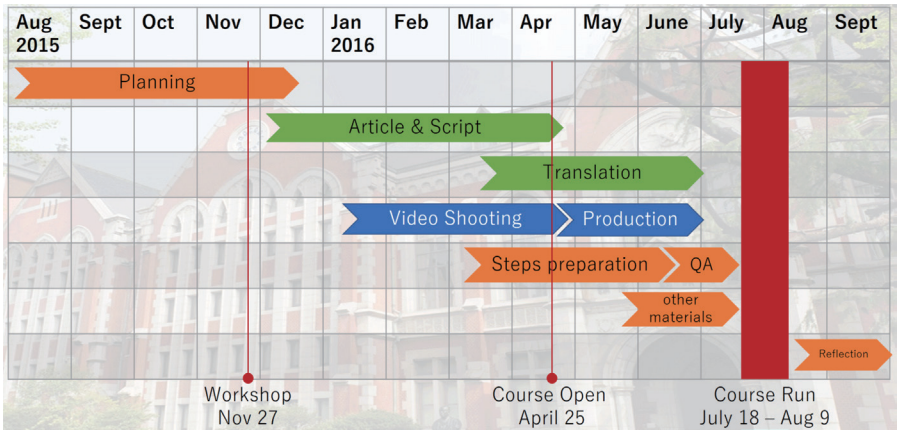

図４　Japanese Culture Through Rare Books スケジュール

4.1　Japanese Culture Through Rare Books

4.1.1　コース概要

日本の古典書籍から日本の文化を学ぶことを目的として本コースは開発された。コース担当教員は斯道文庫の教授らで、３週からなるコースであった。第１週目は日本の書物の形状と内容の相関関係、第２週目は日本の古典文学作品の写本と絵入り本、第３週目は、近世日本の書物出版と学問について取り上げた。このコースは慶應義塾大学として FutureLearn から出す初めてのコースだった。また FutureLearn としても日本の大学が初めて、コースを開講したこととなる。

本コースのメンバーは、コース担当教員が斯道文庫から２名、コースデザインチームが KMD から筆者を含め４名、映像制作チームが株式会社カムサイドと DMC から各１名の計２名、プロジェクト管理チームが DMC から２名、著作権管理チームが株式会社シュヴァンから２名で、国際連携推進室、広報室、FutureLearn チームと協力をした。

FutureLearn のプラットフォーム上、基本的にコース内容は英語で書かれなければならないが、コース担当教員は日本語で内容を作成したため、大量の日英の翻訳作業が必要だった。当初、翻訳会社に外注する案もあったが、コースの内容が極めて特殊であるため、今回は利用せず、外部より日本の古典書籍を専門とする講師を招いて、計３名で翻訳にあたった。さらに斯道文庫の資料だけではコース内の資料をカバーできなかったため、慶應義塾図書館に資料を提供していただいた。

本コースのスケジュールは、2015 年の８月に FutureLearn との契約を提携した時から計画が始まった。その後、2016 年の４月 25 日にコース登録ページの公開を行った。コース登録ページの公開は、コースの予告映像やその概要を学習者が見ることができる。その後、コースに使用する原稿やその翻訳手続き、ビデオの撮影、資料掲載サイトの準備、コースページの準備を経て、同年６月にコースが完成した。その後、FutureLearn がコース全体の品質管理を行い、コースページの修正を行った後、同年７月 18 日にコースが開講した。そして同年８月９日にコース登録が終了した（図 4）。

コースには 141 の国と地域[viii]から 8,667 人の受講登録者が参加して、期間中には 8,000 以上ものコメントが投稿された。

4.1.2　コース準備の課題と解決

コース担当教員は教室での授業設計に関して長い経験と知識がある。しかし、FutureLearn というオンライン上でのコースの授業設計の経験はない。斯道文庫が最初に作成したシラバスでは、従来の教室の授業の枠組で作成された大学の１セメスター分、つまり 90 分× 15 回分あった。これを FutureLearn のコースに当てはめるとコースの長さが６週となり各週で 10 時間の学習時間が必要となる。中には６週という長さのコースもあるが、一般的に比べると長く、各週の学習時間は長くても４時間と定められているので、超えてしまう。さらに今回は日本の古典書籍と漢籍から見る日本文化という壮大なテーマであったため、コースの長さ、学習時間、コース内容が学習者の負担とな

り、コースから離れてしまう可能性が大いにあるという課題があった。そこで、我々はコースを、日本の古典書籍と、漢籍で２つにわけることにして、それぞれ３週のコースとすることとした。

また、コースを日本の古典書籍と漢籍の２つのコースに分けることを決めた後、FutureLearn のコンテンツリーダーである Nigel 氏を招いて、2016 年 11 月 27 日にワークショップを行った。具体的には、ビッグクエスチョンを設定したか、ストーリーテリングを用いたラーニングデザインになっているか、ステップの学習時間は 10 分以内に収まっているか、学習者に質問を投げかけ、会話を促進しているか、などをコース担当者とコースデザインチームで議論し、教室での授業設計から FutureLearn のコース設計へ変換をした。

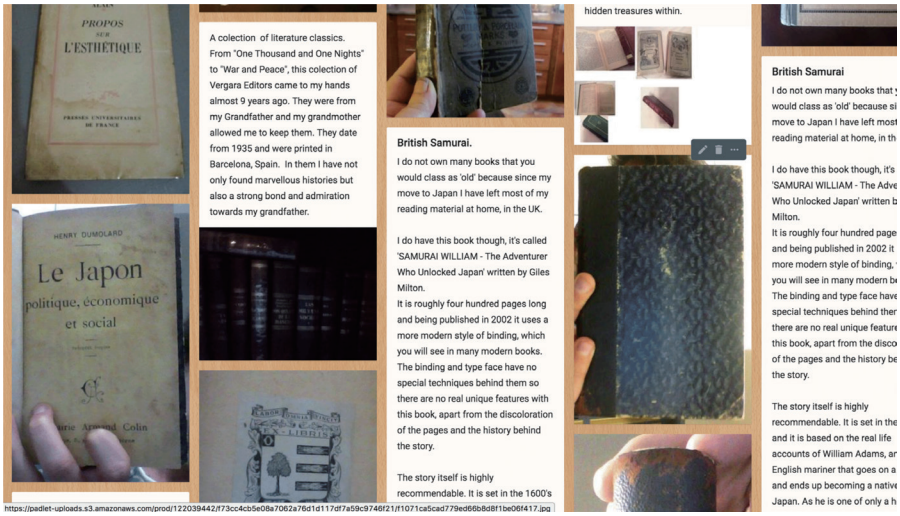

図５　Japanese Culture Through Rare Books の Padlet

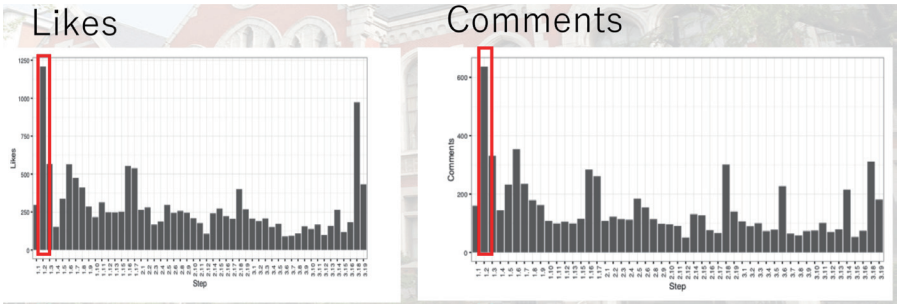

図６　apanese Culture Through Rare Books の Likes & Comments（ステップ別）

このように、コース開発を行う前に、事前ワークショップを行い、コース担当教員とオンラインでのコース設計の合意を取ることで、開発がスムーズに行われることがわかった。

4.1.3　コース開発の課題と解決

（1）会話の誘発

古典書籍からみる日本文化という、とても文化的要素の詰まったコースで予備知識のない学習者でもコメントしやすいような導入的な質問はどうあるべきか、コースデザインチームで議論を重ねた。そこで、「あなたの家にある一番古い本は？」というディスカッションステップを追加し、学習者の会話を促した。残念ながら、FutureLearn のシステム上、コメントボードに画像を掲載することはできないので、ウェブでの画像共有アプリケーションである Padlet を用いて画像をシェアした（図 5）。

その結果、「あなたの家にある一番古い本は？」とい質問で、画像を Padlet にて共有をしてもらったが、投稿が 523 件もあり、コメントの数も Like の数も一番多い Step となった。意図的に会話を促進できたといえる（図 6）。

今回は日本の古い本ではなく、あなたの家にある一番古い本という質問を設定したため、学習者は気軽に画像を投稿することができた。実際に投稿された画像は洋書が多く、古いものは 15 世紀のものと思われる本まであった。このことから、会話を誘発するためには、学習者自身の身近で答えやすい質問を設定すること、必要な場合は画像共有を行うことで、さらに議論が活発になることがわかった。

（2）資料の公開

コースで扱う貴重書について、どう公開するかが課題となった。コース担当者は、通常の教室での授業の場合は、実際に本を教室内に持っていき、手に取って説明し、学生も実際に本を手にしながら本の紙の透かし具合や紙の塗料の色を見て、学習している。オンラインではそれが不可能だ。そこで、127 冊の貴重書の写真 264 枚を斯道文庫、慶應義塾大学図書館の協力のもと、コースデザインチームで外部特設サイト[ix]を作成し、高解像度で貴重書を閲覧できるようにした。慶應義塾大学図書館資料には「Keio University」

という透かし文字を入れた。この高解像度公開により本の紙の虫食いまでもウェブで確認できるようになった。また、日本の本は縦書きという特徴もあるので、ウェブでは珍しいが日本語タイトルを縦書きにした（図 7）。

図 7　Japanese Culture Through Rare Books の特設サイト

（3）多言語対応

日本文化を学ぶコースの担当者は日本語ですべて内容を作成していた。国際的な学習者に対応するために、映像の字幕や、PDF でダウンロードできる資料をすべて日英に対応させた。FutureLearn のガイドライン上、英語に対応していれば問題ないのだが、日本文化に関するコースであったため、日本語にもすべて対応させた。その結果、学習者から「日本文化を日本語で学べて良かった」とのコメントをもらったり、英語が苦手な日本語母語話者の助けとなった。また時代区分は表に、用語はひとつのステップに用語集として、すべてまとめて国際的な学習者の学びのサポートを行った。この用語集は日本人なら知っている日本の地名などもすべて入れ込んだ。

4.1.4　コース評価

学習者データからは、事後アンケートによると、回答いただいた 319 名の学習者のうち、76％の学習者が Excellent と回答した。また、第 3 週まで学び続けた学習者は 30％となり、FutureLearn の平均値である 24％より多い結果となった。また、コースの修了証は 76 枚の購入があった。学習者のコメントからも、「FutureLearn のコースで一番素敵なコースだった」、「慶應義塾大学の他のコースも受講してみたい」、「いつか慶應義塾大学で学んでみたい」等の高評価のコメントをいただいた。

コース担当教員からは、「様々な方から好評を得て良かった。また日英対応をしたため、留学生からも反響があった。海外の大学で講演をしに行った際には、本コースで学んでいた学生に話しかけられたりして、自分の内容が多くの学習者に発信できたことがとても良かった。そして、たくさんの学習者からコメントが来ることは普段の教室での授業では起こりえないことなので、それを見ることが楽しみだった」とコメントをいただいた。

4.2　An Introduction to Japanese Subcultures

4.2.1　コース概要

日本のサブカルチャー、特に 1970 年代以降の日本の若者文化を学ぶことを目的として、本コースは開発された。コース担当教員は、慶應義塾大学文学部教授ら 4 名で、4 週からなるコースであった。第 1 週目は LOVE、第 2 週目は BATTLE、第 3 週目は TECHNOLOGY、第 4 週目は FAN CULTURE と、それぞれのテーマから日本のサブカルチャーを紹介した。コースには 151 の国と地域から 9858 人の受講登録者が参加して、期間中には 11407 件以上ものコメントが投稿された。このコースは慶應義塾大学として FutureLearn から出す 2 番目のコースだった。

本コースのメンバーはコース担当教員以外、基本的に前回と同じである。本コースはコース担当教員のうち、3 名は英語でコースを作成、1 名のコース担当教員は日本語で作成したため、その日本語で作成された週の分のみ、日英の翻訳を外部に依頼した。他の週も外部の英語母語話者によるチェックを依頼した。

本コースのスケジュールは 2015 年の 11 月から計画が始まった。2016 年の 8 月 8 日にコース登録ページの公開を行った。並行して、コースに使用する原稿やその翻訳手続き、ビデオの撮影、資料掲載サイトの準備、コースページの準備、著作権処理を行い、当初の開講予定であった同年 10 月 31 日に向けて作業を進めた。だが著作権処理等が難航してしまい、当初の開講予定日までにコースが完成しなかった。引き続き作業を行って、FutureLearn がコース全体の品質管理を行い、コースページの修正をした後、同年 11 月 25 日に完成した。その後同年 11 月 28 日にコースを開講し、同年 12 月 26 日にコース登録が終了した（図 8）。

コースには 148 の国と地域から 9858 人の受講登録者が参加して、期間中には 11335 件以上ものコメントが投稿された。

4.2.2　コース準備の課題と解決

前回のコースはコース担当教員が２名だったが、今回はコース担当教員４名がそれぞれ１週担当することとなった。そこでコース担当教員が多い中、コース全体の一貫性を保つという、新たな課題が発生した。当初は週毎に少女漫画、少年漫画、ボーカロイド、J-POP という各コース担当教員のジャンル毎にコースを開講する予定であった。しかし、学習者の興味がある週とない週がある場合、途中で学習を辞めてしまうか、週をスキップして学習してしまう可能性が出てきた。それに加えて、週ごとが分裂しているように感じてしまいストーリーテリングの手法からかけ離れてしまうことが問題となった。

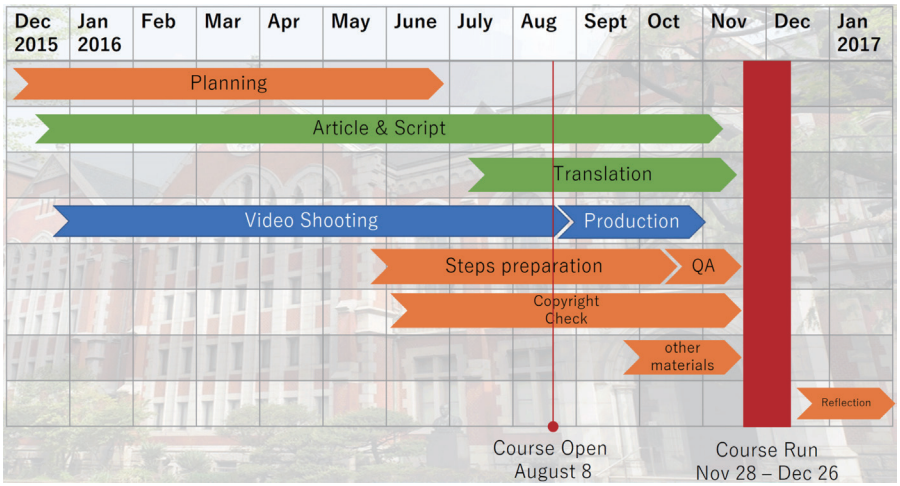

図８　An Introduction to Japanese Subcultures スケジュール

そこでジャンルを各週である程度統合をし、第１週目は LOVE、第２週目は BATTLE、第３週目は TECHNOLOGY、第４週目は FAN CULTURE という４つのテーマを基に、各ジャンルが少しずつ重なるように設計した。また教員１名が代表となり、2、3、4 週目の初めに映像で登場するようにしたことに加えて、最終週には４名のコース担当教員が未来の日本のサブカルチャーについて議論しあうビデオを取り入れた。

その結果、複数名の教員が担当しながらも、コースの一貫性を保った各週横断型のコースを開発することができた。コースの一貫性があることで、学習者に最終週まで学習してもらうモチベーションを保たせることができた。

4.2.3　コース開発の課題と解決

本コースは日本のサブカルチャーについて取り扱うコースであるため、著作物等の利用が大量にあった。普段の教室内での授業であれば、著作権法第 35 条の教育利用における著作物等の利用の権利制限に当てはまるため、問題なく利活用できる。しかし、FutureLearn はオンラインコースであるため、この要件にはあてはまらない。そこで、可能な限り著作権者に連絡を取ったが、点数が多いため一部の著作物については引用として処理することにした。判例から、マンガは一コマのみを引用として処理し、映像内の著作物等は可能な限り写り込みとして、処理した。また、コースデザインチームが私物として所持していたフィギュアやマンガの一部も利用した。

もちろん、すべて無料とはいかず、アニメなどの映像や人物画は有償での許諾を得た。

4.2.4　コース評価

学習者データとしては、事後アンケートによると、回答いただいた 200 名の学習者のうち、91％の学習者が Excellent または Good と回答した。また、第４週まで学び続けた学習者は 24％と FutureLearn 平均と同じ結果となった。今回のコースは前回のコースよりも１週長い、４週間のコースであったが、FutureLearn の平均を保つことができた。また、コースの修了証は 38 枚の購入があった。学習者のコメントも１万件以上あり学習者同士での会話が活発に行われた。

コース担当教員からは、「教室では考えられない人数にコースを届けることができてとてもうれしい」という、やりがいを感じるコメントをいただいた。また「頑張ってコースを作ったから、自分の教室での授業でも利活用したい」など、オンラインコースと教室の授業を将来的には組み合わせてみたいという意見があった。また、「オンラインコースの作成に、かなりの時間をかけたので、教室でのコマ数を減らしてくれれば、第２シリーズをやってみても良い」など、オンラインコースを開講する際のインセンティブの話しが出てきた。また、インセンティブという視点だけでなく、グローバルな規模でのソーシャルラーニングを大学の教育にどのように組みこんでいくかという課題もある。これらは、慶應義塾大学全体で解決しなければならないため、今後の FutureLearn プロジェクトの

大きな課題となる。

5. おわりに

慶應義塾大学では、20 年以上継続的にインターネットを活用したオープンな学びの場の構築に貢献してきた。今回の FutureLearn での経験と実績は、慶應の持つ「知」をよりグローバルに発信して世界の学習者に貢献することだけでなく、ソーシャルラーニングを支援する MOOC 型学習コンテンツ開発とその活用経験を蓄積し、大学教育が今後学生たちに提供していくべき新しい柔軟な学びのスタイル実現への大きなステップになる。

次回配信予定のコースは、斯道文庫から 2017 年 3 月頃に「古書から読み解く日本文化 ： 中国文化の需要」、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスからは、2017 年夏に「量子コンピューティング」を、2017 年冬に「安全保障」を開講予定である。また、本文で取り上げた 2 つのコースも再開講を行う予定である。「An Introduction to Japanese Subcultures」 は 2017 年 4 月頃に、「Japanese Culture Through Rare Books」は 2017 年 6 月頃に再開講を行う予定である。ぜひご登録をよろしくお願いいたします。

[i]「FutureLearn Homepage」 https://www.futurelearn.com/（2016 年 12 月 15 日）

[ii]「Programs（FutureLearn）」 https://www.futurelearn.com/programs（2016 年 12 月 15 日）

[iii]「FutureLearn and Deakin University the first to offer range of degrees delivered entirely on a MOOC platform（FutureLearn）」 https://about.futurelearn.com/press-releases/futurelearn-deakin-university-first-offer-range-degrees-delivered-entirely-mooc-platform/（2016 年 12 月 15 日）

[iv]「About FutureLearn（FutureLearn）」 https://www.futurelearn.com/about-futurelearn（2016 年 12 月 15 日）

[v]「Keio University, “An Introduction to Japanese Subcultures”（FutureLearn）」 https://www.futurelearn.com/courses/intro-to-japanese-subculture/（2016 年 12 月 15 日）

[vi]「Using FutureLearn（FutureLearn）」 https://www.futurelearn.com/using-futurelearn（2016 年 12 月 15 日）

[vii]「Keio Global（Facebook）」 https://www.facebook.com/keioglobal/（2016 年 12 月 15 日）

[viii] 国別データは、このコースを履修した時点で収集された受講登録者の IP ロケーションに基づいてカウントされている。

[ix]「慶應義塾大学特設サイト」https://gc.sfc.keio.ac.jp/fl_img/course01/（2017/02/27 アクセス）